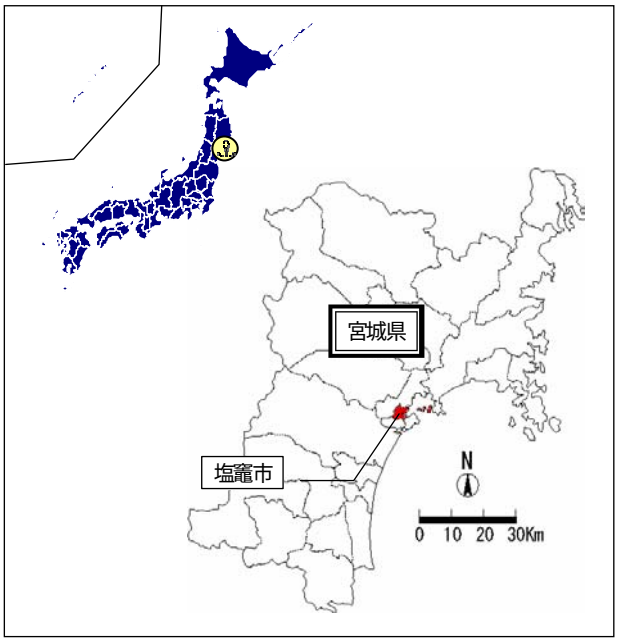
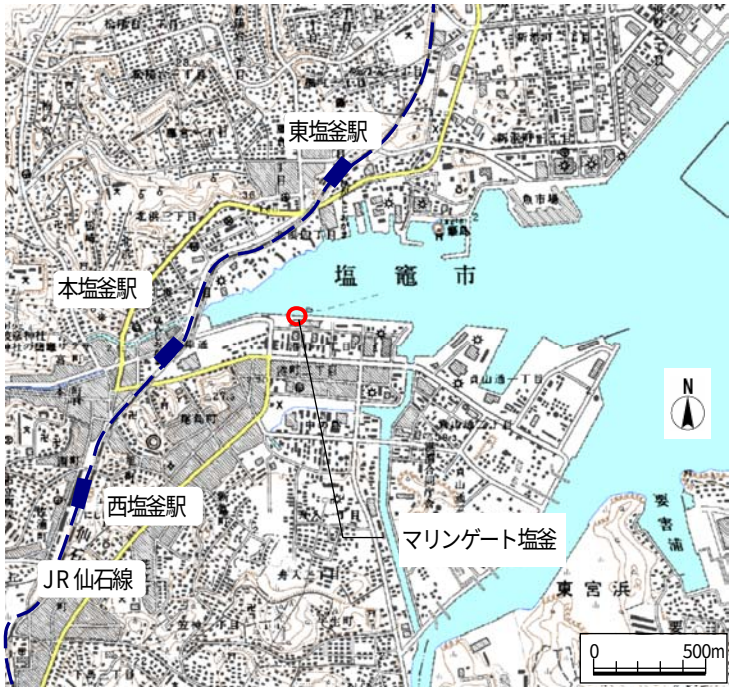
みなとの歴史･風景を活用したみなとまちづくり（仙台塩釜港）

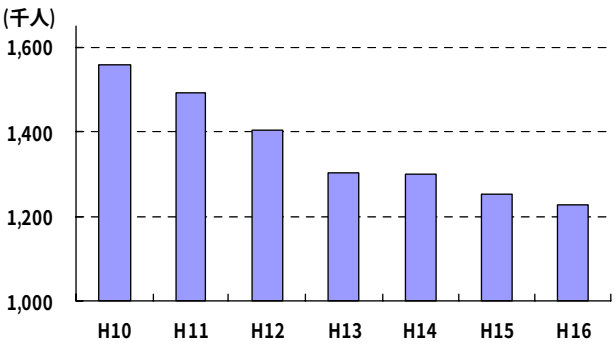


地域の現状



仙台塩釜港〔塩釜地区〕（特定重要港湾）
港 湾 管 理 者：宮城県
取組実施市町村：宮城県塩竈市
人　　口：約 60 千人（平成 16 年 3 月末　住民基本台帳）
観 光 客 数：約 1246 千人（平成 14 年　「全国観光動向」）

【仙台塩釜港（塩釜地区）の全景】



【マリンゲート塩釜入場者数の推移】

地域の物流拠点、松島をひかえた観光船基地

仙台塩釜港（塩釜地区）（以下、「塩釜港」）は、古く奈良･平安の時代、製塩地として開拓されたことにより始まると伝えられ、藩政時代伊達政宗の水運振興策によって仙台の外港としての機能を発揮するようになった。本格的な修築は明治 15 年頃からで、昭和 9 年までに今日の塩釜港の基盤が形成され、昭和 26 年重要港湾に指定された。昭和 46 年に大型船やコンテナ船の入港可能な仙台港区の開港に伴い物流機能が移転し、「塩釜港ポートルネッサンス 21 調査」を実施し、平成 8 年は、旅客ターミナル「マリンゲート塩釜」がオープンした。地域の物流拠点としての役割とともに、日本三景「松島」の観光船基地として、また国際海洋リゾート・レクリエーション拠点として重要な役割を果たしている。

地域の課題

塩竈市は、塩竈神社の門前町、また水産港湾都市として発展し、近隣市町の中心的な役割を担ってきた。しかし、近年の市街地周辺道路の整備とモータリゼーションの進展とともに、商業関連施設の郊外への移転・立地が進み、核家族化を背景にして若年世帯が郊外へ流出していった。その結果、近年の漁業・造船業といった本市の基幹となる産業の低迷や観光客の減少も相まって、中心市街地に住む人や商いをする人は減少し、高齢化や商店街の疲弊が顕著になってきている。

みなとの歴史･風景を活用したみなとまちづくり（仙台塩釜港）

【昭和 27 年頃の塩釜港】

【湾奥部の風景】

【マリンゲート塩釜】

みなとまちづくりの目標

塩竈ヴェネツィア計画の推進

港奥部周辺にはまちづくりのための塩竈神社や門前町のたたずまい、マリンゲート塩釜、仲卸市場をはじめさまざまな資源がある。これらの資源を、「市民自らが考え、行動する」ことを基本に、〝海・みなと〟の視点からまとめた「塩竈ヴェネツィア計画」[1]を推進し、港と中心市街地が隣接しているメリットを最大限に活かしながら、塩竈市が持っている様々な資源を有効活用し、仙台市や近隣市町からの観光客をマリンゲート塩釜や市内の中心市街地へ誘導する。さらに、何度も訪れたいと思わせる仕掛けづくりを図る。

活用したみなとの資産

港の歴史

明治の築港期から昭和の高度経済成長期にかけて、大きく飛躍した時期の塩釜港の歴史を題材にシンポジウムを開催。

港周辺の景観

造船所のクレーン、海沿いの街路樹、旅客船等をライトアップし観光資源としての活用。

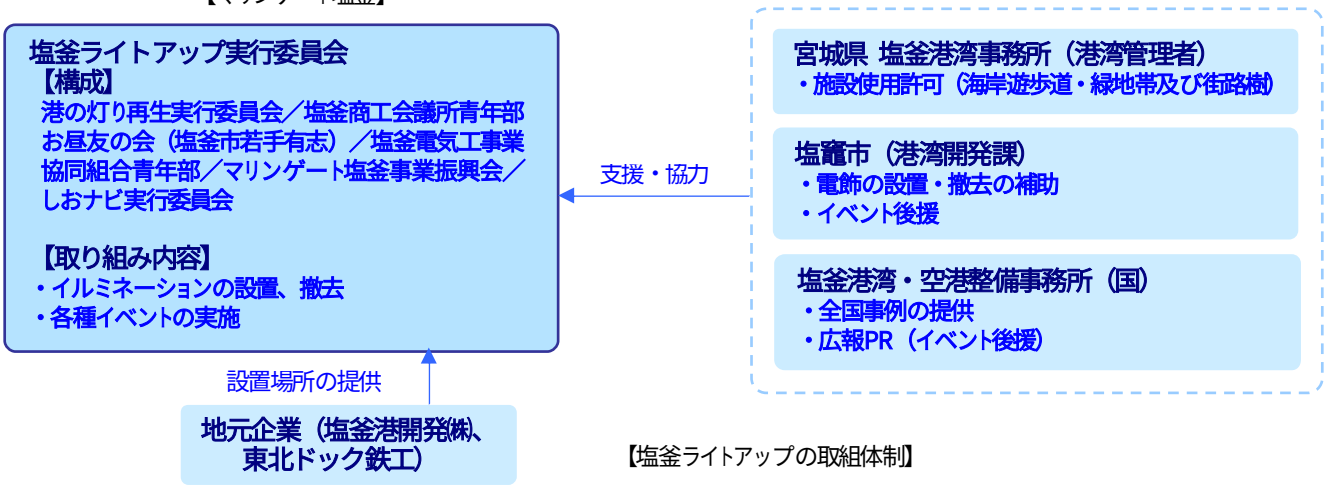
マリンゲート塩釜

平成 8 年 7 月にオープンした塩釜港旅客ターミナル。港の賑わい空間・市民や観光客を集客するためのイベント会場として活用。

港の景観を活用したみなとまちづくり

取組体制

取り組みにあたっては、「塩釜ライトアップ実行委員会」が実施主体となり、一部、民間からの設置場所の提供を受けながらイルミネーション設置（・撤去）やイベントを実施した。



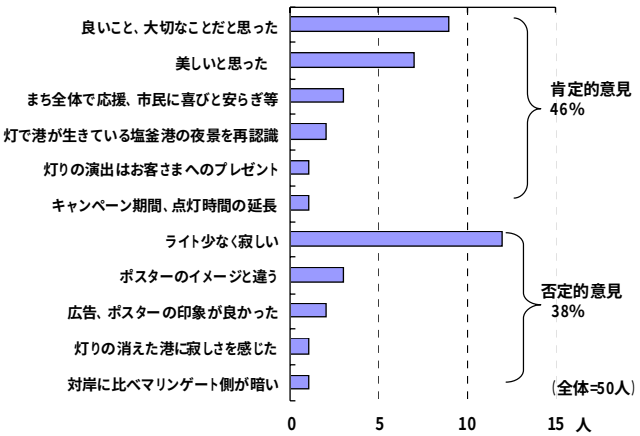
【塩釜ライトアップの取組体制】

[1]塩竈ヴェネツィア計画：平成 15 年に選定された「全国都市再生モデル調査」で、海・港との関わりをより深めた、賑わいのあるまちづくりを進めるために、市民の意見を取り入れながら、既存の事業計画や資源等の具体的活用方策。

みなとの歴史･風景を活用したみなとまちづくり（仙台塩釜港）

【ライトアップされた遊歩道】

【ライトアップ設置場所】



【塩釜ライトアップアンケート】

塩釜港ライトアップ「エンジェルウインク」

取組概要

塩竈の活性化と子供達に夢を持ってもらうため、冬の塩釜港をライトアップした。また、初日のマリンゲート塩釜での点灯式には、来訪者へのプレゼントや温かいスープの提供、ゴスペルグループのライブ等を実施した。

実 施 日：平成 16 年 12 月 5～26 日（22 日間）
場　　所：塩釜港周辺（マリンゲート塩釜、造船所クレーン、マリンゲートから海辺沿い緑地帯【260m】）
来訪者数：約 10,000 人
※12 月 5 日の点灯式には約 1,000 人参加

好評で継続実施の要望が多いライトアップ

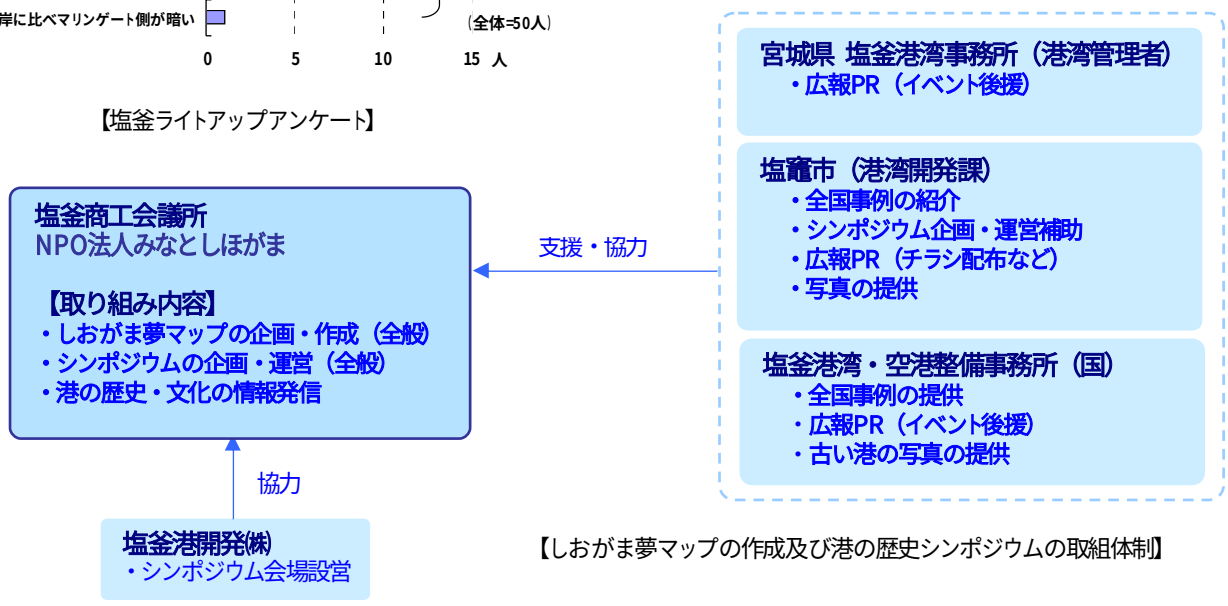
取組の成果

- ライトアップの「継続実施」と「必要性」を望む声が多く、まちの賑わいの再生やマリンゲート塩釜の活性化に意見・提言も多く見られた。
- ライトアップに肯定的な意見は、全体の 5 割近くを占めたものの、ライトが少なく寂しい等の否定的な意見も 4 割近くあった。

港の歴史を活用したみなとまちづくり

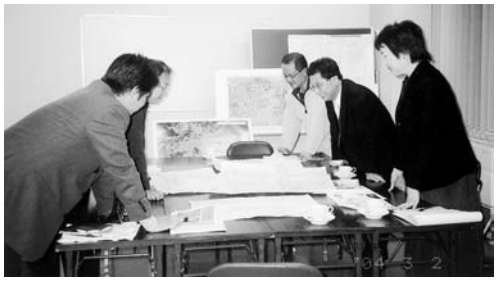
取組体制

しおがま夢マップの作成、港の歴史シンポジウムの取り組みにあたっては、それぞれ、「塩釜商工会議所」、「NPO 法人みなとしほがま」が主体となり、行政（県、市、国）の協力のもとに進めた。



【しおがま夢マップの作成及び港の歴史シンポジウムの取組体制】

みなとの歴史･風景を活用したみなとまちづくり（仙台塩釜港）



【しおがま夢マップ検討状況】

【しおがま夢マップ】

【港の歴史シンポジウムの状況】

しおがま夢マップの作成

取組概要

みなとまち塩竈の未来の姿を自由な発想で出し合い、みなとまち再生のためのまちづくりを考えるきっかけとして、しおがま夢マップを作成し、市内各所に配布した。

作成期間：マップ作成委員会（平成 16 年 5～10 月（10 回））
場　　所：塩釜商工会議所会議室
検討事項：未来の塩竈の理想像と絵図の策定
掲　　載：平成 17 年 1 月初旬（塩釜商工会議所ニュース市民版）

まちの将来やまちづくりへの関心アップ

取組の成果

❍ **市民からの意見の多くは、「しおがま夢マップの将来に向けて実現して欲しい」というものであり、塩竈市の将来やまちづくりへの関心を高めたと推察できる。**

「港の歴史」シンポジウムの開催

取組概要

塩釜港の古い写真を素材に、みなとまち塩竈の歴史を探訪し、港とともに発展してきた塩竈を再発見して、今後のまちづくりに活かすためのシンポジウムを開催した。

実 施 日：平成 16 年 7 月 24 日
場　　所：マリンゲート塩釜
参加者数：約 100 人

歴史発掘の取り組みは好評

取組の成果

❍ **塩釜港の歴史発掘の取り組みや情報発信は、大多数が「賛成で、実施してほしい」との意見であった。**

❍ **参加者の年齢層が高く、中年・若年層の興味・関心を引きつけるかが今後の課題といえる。**

今後のみなとまちづくりの取り組みへ

■ ライトアップの通年実施へ ■

ライトアップの通年実施を目指す。港だけでなく中心市街地、住宅地との連携を検討していく。

■ 港の歴史・文化の情報発信 ■

港の海運を伝える建造物等の調査研究し、保存・活用に向けた市民意識の向上を図っていく。

■ 塩竈ヴェネツィア協議会の継続 ■

塩竈ヴェネツィア計画推進に向けて、市民団体の代表で組織する協議会を継続していく。

Column リーダーに聞く！

❖ **取り組みで苦労した点は？**

――― 『みなとまちづくり』に関するいずれの事業について、地域活性化のために塩竈を何とかしよう、塩竈の魅力を引き出そうと考え、市民団体や市民個人が集まり実行したものであります。人集めや資金集めに苦労しましたが、行政と連携し、一つ一つ課題を解決していき、事業を実施することができました。

❖ **今後の『みなとまちづくり』に向けて行政への期待**

――― 『みなとまちづくり』は、市民が中心となり実行することが大事ですが、市民だけではどうすることもできない場合があります。それを埋めるためには行政との連携強化が大事になってきます。特に、『みなとまちづくり』に対しての的確なアドバイス、他地域の情報提供、予算の援助、行事への積極的な参加及び広報活動等などを期待します。

NPO 法人みなとしほがま
副理事長：菅原　周二氏